

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

現代日本文学におけるチンギス・ハーンの利用： 研究翻訳が文学作品へ転換される時

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-02-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小長谷, 有紀 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4523

現代日本文学における チンギス・ハーンの利用

—研究翻訳が文学作品へ転換されるとき—

小長谷有紀

国立民族学博物館

1. はじめに

民主化および市場経済への移行を果たしたモンゴル国では、チンギス・ハーンの名前や肖像が多くの商品に使われるようになり、そうした利用の自由を制限する法律が必要ではないかと国会で議論されたことがあった¹。また中国内モンゴル自治区では、チンギス・ハーンの祭祀空間が観光化されることによって伝統的な文化が失われ、従来の生活も脅かされるという反対が見受けられた²。このように、チンギス・ハーンは、その末裔を自称する人びとにとっては正統性 (orthodoxy) や真正性 (authenticity) が問われる問題であり、文化資源として必ずしも自由にアクセスできるものではないと知れる。

一方、日本では、歴史的にチンギス・ハーンとの直接的な関係がほとんどなく、それゆえにチンギス・ハーンはほぼ自由にアクセスすることのできる文化資源である。たとえば、ジンギスカン鍋という焼き肉用の料理器具があり、誰でもどこでもチンギスやチンギス・ハーンという焼肉料理の店を開くことができる。

本稿では、そうした日本人の一般的な利用の基礎となるイメージを与えていると考えられる、文学的な利用について考察する。具体的には、『元朝秘史』あるいは『蒙古秘史』という名で知られている、13世紀のできごとを描いたとされる書が、研究者による翻訳を通じて一般に知られるようになり、それらがさらに作家に利用されて小説となり、またさらに

演劇や映画に利用されていることに注目して、そうした文芸界におけるチンギス・ハーンの日本的受容について明らかにする。

そもそも、日本人はチンギス・ハーンが大好きであると言っても過言ではない。たとえば、明らかに史実ではないにもかかわらず、源義経を成吉思汗と同一視するという歴史的ミステリーが今日なお新しく生産され続けている³。なぜ日本人はこれほどチンギス・ハーン好きなのであろうか。

源義経が成吉思汗になったという説の起源と展開および論争については、すでにいくつかの研究がある。森村宗冬の整理によれば、江戸時代において、『本朝通鑑』に義経が生存しているという噂が記録されており、さらには、『金史』別本に大陸へ渡ったと記録されている、という話そのものが捏造された (森村2005)。また宮脇淳子の解説によれば、明治時代になると、世界を制覇したチンギス・ハーンは日本人であると主張することによって西欧に対して抱いていた劣等感が克服されようとした (宮脇2002: 217–219, Miyawaki 2006)。こうした虚構の展開は、日本が国家的に大陸進出を果たそうとした時代背景と無縁ではなかったであろう。

3 「義経＝チンギス・ハーン説」を日本に広めたのは、小谷部全一郎著『成吉思汗ハ源義経也』(1924)であり、この著者については土井全二郎著『義経伝説をつくった男—義経ジンギスカン説を唱えた気骨の人・小谷部全一郎伝』(2006)という評伝がある。また、この著作の内容を利用して、高木彬光は『成吉思汗の秘密』(1958)という推理小説に加工した。これ以降も多数の「義経＝チンギス・ハーン説」が今日も再生産され続けており、現時点では丘英夫著『義経はジンギスカンになった! その6つの根拠』(2005)が最新である。そもそも、社会が難局を迎えた時に人びとは積極的に過去の英雄を呼び戻して対処したり、国家が世界へ進出しようという時に人びとを鼓舞するために偉大な人物が利用される、といった空想力の問題が潜んでいるとも考えられるが、それについては今後の大きな課題として残しておきたい。

1 2006年10月の国会で、チンギス・ハーンの名前および画像を商標として利用するための法律が議論されたが、承認されなかったようである。
2 中国では、チンギス・ハーンをモンゴル族出身の「中国的英雄」とみなすのが公式見解であり、近年では内蒙古自治区オルドスにあるチンギス・ハーン廟をテーマパーク化するにあたって、モンゴル族にとっての聖域が結果的に漢化するという反対運動が生じた (Bulag unpublished)。一方、こうしたチンギス・ハーン中国化に対して、モンゴル国では、より強大な銅像や施設で圧倒しようとする傾向があるように思われる。

本稿ではもっぱら、それ以後の現象をとりあげる。すなわち、第二次世界大戦後の日本文学(本稿ではこれを現代日本文学と称することとする)において、チンギス・ハーンを素材として利用した小説を取り上げ、その文学的主題の起源と展開ならびに多様性を明らかにするものである。日本人がなぜチンギス・ハーンをこれほど大好きになったかという理由の一端が了解されるに違いない。

2. 日本における『元朝秘史』の翻訳と文学利用

13世紀のモンゴルの歴史について自らの言葉で記した書物である『元朝秘史』は、歴史的事実を反映したものではなく、あくまでも物語として編集されている。したがって、当時の歴史というよりももっぱら生活習慣や言語を分析するうえでの貴重な資料であるとみなされ、中国や欧米では19世紀末から研究されていた。そうした研究成果を取り込みながら、日本では現在までに4人の研究者によって全文の邦訳が試みられている。

最初の邦訳は歴史学者の那珂通世の手になる。早くも1907年に原文に忠実な邦訳と訳注のほどこされた専門書として『成吉思汗實録』が刊行された。本書は本邦のみならず、世界で最初的全訳書となった。さらに1940年になると、言語学者の小林高四郎が『蒙古の秘史』という題名で新たに訳書を刊行した。こちらも専門的な研究成果を反映したものではあるが、むしろ一般向けの読み物として提供されている。なお、小林高四郎は同じ頃、1936年、世界的なモンゴル学者であるウラヂミルツォフの著作も『チンギス・ハーン傳』として邦訳しており、研究者や一般利用者の便を大いに図っていた。

那珂通世の専門書『成吉思汗實録』と小林高四郎の一般書『蒙古の秘史』の違いは、「序」のあと、本文に先立って記された「序論」ないし「解題」において鮮明に示されていると言えよう。前者の「序論」には、もっぱら研究史が述べられているのに対して、後者の「解題」には、研究史を踏まえつつも、そもそも「如何なる秘事が記してあるのか」について解説されている。そして、この後者の「解説」に提示された「秘密」の理解こそは、やがて日本文学において独自の解釈が発生する根源となるのだが、これについては後述しよう。

その後、戦後になってから、平凡社の東洋文庫シリーズとして『モンゴル秘史』巻1が1970年、巻2

が1972年、巻3が1976年に刊行されていく。歴史学者の村上正二が、那珂通世以後の斯学の成果を反映させて、詳細な訳注を施したものである。

また、言語学者の小澤重男はライフワークとして『元朝秘史全訳(上)』を1984年、『元朝秘史全訳続攷(中)』を1988年、『元朝秘史全訳続攷(下)』を1989年に完成させたのち、1997年に一般向けに岩波文庫として『元朝秘史』(上)(下)を上梓した。

一方、こうした研究者の成果を利用することによって、日本ではこれまでチンギス・ハーンを主人公とする小説が幾多も創作されてきた。第二次世界大戦後に限定し、研究者による解説書の類を除くと、小説家による作品としては以下の5つが代表的である。

まず、榎本捨三の『成吉思汗』が1955年に刊行され、本書は1972年に『ジンギス汗』として再刊された。ただし、両者はまったく同じではなく、微妙に章のタイトルや字句が修正されている。その再刊に先立って、井上靖の『蒼き狼』が1958年から『文藝春秋』に連載され、1959年に書籍として刊行された⁴。榎本の再刊本以後の作品を年代順に並べると、陳舜臣の『チンギス・ハーンの一族』が朝日新聞に1995年4月から2年にわたって連載されて1997年に書籍となり、その後、森村誠一の『地果て海尽きるまで—小説チンギス汗』が2000年に刊行され、堺屋太一の「世界を創った男—チンギス・ハーン」が日本経済新聞の連載として2006年から始まり、2007年に書籍として刊行された。

チンギス・ハーンを素材とした日本の代表的な上

4 井上靖は本小説の発表直後に『別冊文藝春秋』72号で、創作に参照した著作群を列挙しており、その文章は新潮社文庫本『蒼き狼』のあとがきにも転載されている。そこには、研究書のほかに、幸田露伴の戯曲や尾崎士郎の『成吉思汗』、柳田泉『壮年のテムジン』など日本人の文芸作品も含まれている。それらの文芸作品が担った影響力について分析することは、近代日本文学の研究領域に属しており、今後の課題として残す。また、それと同時に、欧米で刊行されたチンギス・ハーン関係の書籍の邦訳や、まれにモンゴル人による著作の邦訳など1930～40年代の資料に関しても言及する必要があるだろう。それらの課題をひとつだけ置いて、本稿では、国民的ベストセラーとなった井上靖の『蒼き狼』の前後からの跡づけとなることを断っておく。

記5作品は⁵、内容上、明らかに2つに分けることができよう。1つは陳舜臣と堺屋太一の作品であり、もう1つは井上靖、榎本捨三、森村誠一の作品である。

前者2点はともに新聞連載であるという共通点をもつと同時に、内容としてチンギス・ハーン個人を超えて13～14世紀当時の社会現象全般を扱っており、歴史を理解することに主眼を置いた作品であると言えよう。

一方、後者3点は、もちろんチンギス・ハーン1人だけを扱っているわけではないが、その扱いの比重は大きく、前者に比べて歴史的解説は少ない。歴史的解説の代わりに文学的主題が設定されている。その内容は作者によってやや異なるが、後述するように〈出生の秘密〉ないしは〈出生の疑惑〉は中核を成している。

ここでは、井上靖の『蒼き狼』が発表当時、歴史小説ではないと厳しく批判されていたことについてのみ言及しておこう。作家の大岡昇平は、文芸雑誌『群像』に「『蒼き狼』は歴史小説か—常識的文学論(1)—」という挑戦的なタイトルの評論を寄稿した。「歴史小説は近代の産物で、歴史的人物を人間的に書くのを原則とする。人間とは無論現代人であるほかはないが、現代的動機のために、歴史を勝手に改変していいかという、そうは行かない」(大岡1961:221)という箇所に端的に表されているように、作者すなわち井上靖が、史料を曲解して心理ドラマにしてしまったことを痛烈に批判している。

これに対して井上靖は同じく『群像』で「自作『蒼き狼』について」と題して直ちに応酬し、「『蒼き狼』に於いて私が書きたかったのは、歴史ではなく小説である。……(中略)……小説家の歴史に対する対し方は、歴史学者の解釈だけでは説明できないところへは行って行き、表面に見えない歴史の一番奥底の流れのようなものに触れることではないか。

……(後略)……」と控えめながら、しかし確信的に、解釈を織り込む自由が作者にはあると主張している(井上1961:176)。こうした論争はさらに、歴史小説とは何かという議論に発展する(宮脇2006)。

このように、井上靖の名作とされる『蒼き狼』は、発表当時においてすでに歴史小説の定義にかかわる議論を呼ぶほどであった。言い換えれば、そもそも歴史的文脈があまり考慮されていないだろうことが指摘されていたのである。したがって、実際に歴史的な文脈から逸脱している可能性は高く、その意味でまさしく文学的である、と評価することもできよう。それは同時に、モンゴル文化という文脈から脱文脈化されている可能性もきわめて高いことを容易に推測せしめる。

創作活動のための資料として、大岡昇平はドーソンの『モンゴル史』のほかに、『元朝秘史』の那珂通世訳『成吉思汗實録』を挙げ(大岡1961:219)、原作者である井上靖は『元朝秘史』のほかにたくさん資料を挙げているが(井上1960:167-168)、にもかかわらず、主たる史料であるとする『元朝秘史』については「那珂通世博士の名著」についてのみ明記しており(井上1960:166)、小林高四郎の『蒙古の秘史』には言及していない。しかし、1959年に先行する訳書はすでに2種類存在しており、『成吉思汗實録』や『蒙古の秘史』が参照されなかったはずはあるまい⁶。

以上のように、日本では、1907年に刊行された『成吉思汗實録』と1940年に刊行された『蒙古の秘史』という研究翻訳を情報源としながら、歴史や文化の文脈を逸脱する傾向をもつという意味できわめて創作的に、1958年に井上作品が創出されたのである。2007年、角川春樹事務所によって映画「蒼き狼—地果て海尽きるまで」が製作、上映された。この映画の原作は森村作品とされており、映画のサブタイトルはたしかに森村作品のメインタイトルではある。しかし、映画のメインタイトルはむしろ井上作品のタイトルそのままである。このタイトルの借用関係

5 これら5作品のうち4作品(その後続再刊も含めれば5作品)は、チンギス・ハーンの名をタイトルに付しており、その日本語表記がすべて異なっている点は興味深い。歴史学者のあいだではチンギス・カンとするのが常套であるが、現代における利用を扱う本稿では、現代的呼称としてチンギス・ハーンを一貫して用いる。ただし、書名などの引用は原著のとおりとする。

6 2人の論争を通じて、結果的に小林訳『蒙古の秘史』だけが言及されずに終わった。単なる偶然かもしれないが、『蒙古の秘史』の「解説」にこそ本稿で論じる問題の鍵があるだけに、この文献に対して原作者がたまさか言及していないという事実は、結果的に「秘匿」が生じている、と見ることができよう。

に明示されているように、日本では井上作品のインパクトがきわめて大きく、当該映画に描かれた物語の主題や構成もむしろ井上作品を踏襲していると思われる。

この角川映画「蒼き狼」は日本とモンゴルで同時に上映され、モンゴルでは内容に対する批判が相次いでいた(小長谷2007)。モンゴル人による諸批判の根本的な原因は、彼らが理解する自らの歴史と文化に対する文脈から、当該映画が逸脱していたことにあった(フムス紙2007年3月号・ゾーニーメデー紙2007年3月16日)。当該映画について指摘されている脱文脈化は、そもそもその原作、さらには遡って映画タイトルに小説のタイトルが借用されている、井上作品にこそ起を発するに違いない。

以下では、日本人研究者による4点の邦訳のうち戦前の2点が、戦後に文学作品の創作へと応用された時点、すなわち榎本作品や井上作品が生まれるとき、どのように脱文脈化が生じていったかについて、具体的な状況を跡付けていく。

3. 「モンゴルの秘密の歴史」の「秘密」とは何か?

『元朝秘史』の研究史において、そもそも本書のタイトルそのものが研究課題の1つであった。本書のモンゴル語タイトルは直訳すると「モンゴルの秘密の歴史」であるとされている。小林高四郎は『蒙古の秘史』の「解説」において「秘史」について以下のように記している(小林1940: 13)

「宮廷の秘録たる本書は「外人に伝えしむるべきものにあらざ」とて史臣にすら修史の参考とするを許されなかった程であった(元史巻181、虞集伝)が、然らば如何なる秘事が記してあるのか」と。

この質問に対する回答も用意されていた(小林1940: 14)。

「例之遠祖に関する狼鹿交配開国伝説はしばらくにおいて、チンギスの母ウゲルは父のイエスゲイがメルキッ部のチレドから略奪したものであること、イエスゲイが敵人タタル部に毒殺されたこと、チンギスが弟のハサルと共に異母弟(原文ママ)バクテルを狩猟の獲物分配のことから射殺したこと、チンギス自らが宿讐タイチグット部にとりこにせられ、その妻ブルテがメルキッ部にとらえられた、(長子のデュチは敵人の子であろうと伝えられている)、十三翼の戦でジャムカに敗れたことなど、なおその

他秘すべき事柄を忌諱するところなく録しているのである。」

『元朝秘史』は続を含めると全部で12巻から成っている。そのうち、チンギス・ハーンの母が略奪された経緯と父が毒殺されるシーンは巻1にあり、異母兄を殺したり、自ら宿敵に捕らえられたり、妻を奪われたり、といったエピソードはいずれも巻2にあり、十三翼の戦いは巻4にある。したがって、この小林高四郎の解説は総じて、本書の前半部に注目して、チンギス・ハーンのもっぱら幼少期の苦労話をとりあげ、それらが秘密であると説明していることになる。極端に言えば、幼い頃の苦労話を他人に隠すべき「恥」として理解していたことになる。ちなみに、これらの小林によって抽出された「秘密」群のうち、後年の作家たちがとりわけこだわるのは、()の中に書き足されたこと、すなわち長子ジュチがチンギス・ハーンの実子ではないという噂であることをここで喚起しておこう。

一般に、さまざまな技術伝承にかかわって「秘伝の書」があることを想起すれば、『元朝秘史』の「秘」とは何らかの重要な「秘訣」が記されているから隠さなければならないのだ、と解釈することもできよう。言い換えれば、必ずしも「恥」を想定する必要がないであろう。

本書においてそうした「秘訣」が書かれているかどうかを敢えて探してみると、本書が全般的に繰り返し述べているのは、チンギス・ハーンに対する忠誠心のあり方である。

たとえば、巻5の149節ではニチュグト・バーリン氏のナヤアが投降する場面がある。投降するにあたって、主君を殺すにしのびず、逃がしてから投降していることに対して、チンギス・ハーンは、旧来の主君への忠誠心を賞賛するのである。同様に、巻6の185節では主君を見捨てることができずに主君を逃し、自ら防戦して戦ったカダクバートルを大いに誉めている。さらに、巻7の188節では王汗の子センゲンの子友ココチュが主君を裏切るとき、これを諫めた妻を対で登場させうえて、主君への裏切りをなじった女を誉めたうえ、主君を裏切った男(ココチュ)を斬り捨てさせている。さらに巻8の200節でも、ジャムカを捕らえてきた彼の僚友たちを裏切り者として斬り捨てさせている。

このように、主君への忠誠心をもつ者に対して優遇する一方、逆に、主君を裏切った人間に対しては

信頼できないとして直ちに斬り捨てさせている。このように対となる処遇と処分とが繰り返して表出されているのである。

印象的に反復表現されている忠誠心の具現は、同時に、チンギス・ハーンの人心掌握術であると言ってもよいであろう。岡田英弘の言うところの「将に将たるの戦略」(岡田1986: 80)に相当する。いわゆるリーダーシップ論が表現されているのであり、これを仮に「秘訣」と読み解くならば、幼少の頃に異母兄を射殺したという挿話も、新たな読み解きが可能となるだろう。すなわち、チンギス・ハーンの意味に従わない者は父系の血がつながっていようと容赦はしないという意味を示すエピソードと化すだろう。

以上のように、本書の前半部分に偏ることなく、全体に目配りしてメッセージを抽出しようと試みると、本書の「秘密」の解釈として「人身掌握の秘訣」であるという理解も可能となるのである。

一方、本書の前半部分ではなく、より狭く、冒頭部分にのみ注目すると、以下のように、さらに別の「秘密」の解釈も可能となる。

祖先祭祀においては自らのメンバーシップを主張するために、その系譜を口上することが義務付けられてきた(Horchabaatar1987: 12)。そもそも、族外婚を維持するには系譜の理解が必定である。たとえば、ブリヤート族のあいだでは7~9代を隔てていれば結婚してもよいとされていた(Badamkhatan1996: 43)。言い換えれば、それだけ隔たっていなければ、婚姻対象外とされていたわけである。こうした婚姻制度を有する社会において、祖先祭祀に参加するメンバーに長大な系譜の暗記が求められていたとしても不思議ではあるまい。祖先祭祀を実行する集団以外の者にとって、祭祀はそもそも参加しえない秘儀であり、そのメンバーシップを問うための系譜も秘密であってよいだろう。

すなわち、『元朝秘史』の冒頭部分に注目するならば、この冒頭部分に書かれている「系譜」こそが、その記述内容の如何に関わらず、チンギス・ハーンを祖先として祭る集団にとってまさしく「秘密」であったのだ、と了解することもできよう⁷。

このような幾つかの解釈が「秘密」について可能ななかで、小林高四郎はもっぱら幼少期の苦勞話を恥ずかしい「秘密」として、一般書で解説したのであった。

こうした「秘密」の解釈は、続く柳田泉の著書『成吉思汗平話 壮年のテムジン』に影響を与えていたようである。明治文学研究の先駆者といわれる柳田は、その当該書の「序」に相当する部分で、那珂通世の邦訳を旧訳、小林高四郎の邦訳を新訳と呼んで区別し、もっぱら旧訳を利用して、新訳は少し参照したにすぎないと述べたうえで、本論に入ると冒頭部で次のように述べている(柳田1942: 7)。

「チンギス・ハーンがどうしてチンギス・ハーンとなったのか、そのチンギスがチンギスとなるまでの、悲しい、辛い、苦しい、しかも猛く雄々しい、男性的な奮闘の若き日を、史実によって、わたしに及ぶだけ詳しく語りたい」とある。小林と同様に、チンギス・ハーンの若き日々は苦難の時代として了解されている。

ただし、柳田の場合は話を具体的に進めるにあたって、テムジンの妻ボルテは妊娠してから略奪されたという説明をわざわざ2度もしている(柳田1942: 92,101)。したがって、息子ジュチの出生についてチンギス・ハーンは悩むべくもない。またおおよそ『元朝秘史』の巻10までの物語となっているので、続編巻11にある、弟チャガタイが兄ジュチの出生の秘密をとがめるというシーンは、そもそも割愛されている。こうした処理のしかたに、柳田のある種の意図を見ることができないのではないだろうか。柳田は、テムジンは妻ボルテが略奪されるといった苦勞を経験したけれども、略奪された妻の生んだ子ジュチは間違いなく実子であるという自己流解釈を提示しているのである。これは明らかに、小林高四郎の一般書に書かれた解釈を拒絶してみせたことになる。新訳をあまり参照していないという宣言は、実はこの点における意思表明になっている。参照していない、と言うよりも、参照して否定している、あるいは批判的に参照している、と言えよう。

モンゴル語の研究者である小林高四郎と、明治文学の研究者である柳田泉とのあいだで生じている解

7 『元朝秘史』については、年代記という歴史書か、歴史文学かという性格をめぐる議論が繰り返されてきた過程で、岡田英弘は祖先祭祀の文献すなわち「縁起」のようなものであるという分かり易い見解を提示している(岡田1986: 12-13)。ホルツバートルの見解もこれに近い。こうした見解は「秘」の語義を系譜に設定する解釈と整合する。

釈の違いは、書かれた現象としてのみ分析すると、単純に「妻ボルテの妊娠が略奪の前か後か」という時間的な問題として矮小化されうる。すなわち長子ジュチの出自をめぐる疑惑にほかならない。

このように彼らが対比的な解釈を提示したことによって、『元朝秘史』の「秘密」を〈出生の秘密〉へと還元する解釈がのちに日本文学において出現する準備は整っていたのであった⁸。

4. 主人公チンギス・ハーンに関する〈出生の秘密〉の発見

井上靖の『蒼き狼』は、そのタイトルに主題が明瞭に現われている。上述したように大岡昇平が史料を曲解していると非難するのに対して、井上靖は以下のように応答している（井上1961：175-176）。

「……（前略）……私が成吉思汗について一番書きたいと思ったことは、成吉思汗のあの底知れぬ程大きい征服欲が一体どこから来たかという秘密である。……（中略）……一人の人間が性格として持って生れて来た支配欲といったようなものでは片づきそうもない問題である。こうしたことは、もちろん、私にも判らない。判らないから、その判らないところを書いて行くことで埋められるかも知れないと思ったのである」。

作家井上靖にとって創作動機となる「秘密」は、「征服欲」の理由、その源泉なのであったことが了解される。そして井上自身が見出した回答が、〈蒼き狼の血の原理〉という理解であった。

井上は、チンギス・ハーンの祖先には蒼き狼の血が流れているとし、この血を受け継ぐべきところを、自分自身が父の実子ではないらしいという疑いを持っているために、その疑惑を晴らすために刻苦勉勵するというストーリーになっているのである。

このチンギス・ハーンの出自疑惑について、大岡昇平は「井上氏の第二の発明」（大岡1961：221）と

称している。それに先立つ第一の発明とは、成吉思汗をして即位式にて「蒼き狼は敵を持たねばならぬ。敵を持たぬ狼は狼でなくなる」といった演説をせしめている点である。つまり、小説全体を貫いて「蒼き狼の原理の発明」（井上1961：176）がなされているというわけである。

ところで、『元朝秘史』の冒頭部分は、神話的な記載があり、祖先の系譜が示されている。それによれば、蒼き狼の系譜とチンギス・ハーンの祖先であるキヤト一族の系譜は「接木」された関係にあり、そもそも血統として繋がっているわけではない。蒼き狼の血統の家に嫁にやってきた女性アランゴアが、夫ドブメルゲンを亡くしてから、光によって身ごもった子どもの一人がボドンチャルであり、その子孫がチンギス・ハーンの父の系譜キヤト氏一族であるから、蒼き狼の系譜はもともとチンギス・ハーンの系譜と「接木」の関係にある。遊牧民集団がビッグバーンを経て膨張するにあたっては、このように異なる系譜がいわば「接木」されていったものと推測される。

『元朝秘史』の冒頭に述べられている「蒼き狼」という表現に魅せられたに違いない井上靖は、この血をそもそも受け継がない一族の物語であるにもかかわらず、この血が流れていると誤って想定しておき、そしてそれが無いことを自ら疑い、その疑惑を晴らすために奮迅するという、〈蒼き狼の血の原理の発明〉をしたことになる。

井上、大岡の論争に分けて入った、山本健吉は、「歴史と小説」という記事を寄せて、井上作品を擁護してみせた（山本1961）⁹。

「史料によれば、成吉思汗の子供のジュチは、その身にモンゴルの血が流れているかどうかを疑わせるような、出生の秘密を持っている。その秘密を、成吉思汗自身にも負わせることによって、彼の行動を強い意志による悲劇として裏づけることができる」（下線は筆者小長谷による）。

こうして初めて、井上作品の文学的主題は〈出生の秘密〉であることを山本は明示したのである。それではいったい井上靖はいかにして『元朝秘史』から〈出生の秘密〉を創作したのであろうか。

8 柳田に先立ち、1940年に尾崎士郎の『成吉思汗』が刊行されているが、この作品では、長男ジュチが実子でないことは明らかであり、にもかかわらずそれを意に介さない大人物としてのチンギス・ハーンと、それを気にするジャムカという対比を描いている。言い換えれば、ジュチの出自問題は両雄の争点として取り上げているので、さほど秘密めいてはいなかった。

8 山本健吉の参画によって歴史と小説の関係に関する論争は、叙事詩とは何かという議論へと微妙に変化した（宮脇2006）。

そもそも〈出生の秘密〉という文学的テーマ自体は、『源氏物語』にも話の始まりとして見受けられるものである。そして、とりわけ近代になると日本文学における中心的な主題となったことを斎藤美奈子が『妊娠小説』という近代文学評論で分析している(斎藤1997)。

斎藤美奈子によれば、森鷗外の『舞姫』(1890)や島崎藤村の『新生』(1918)に始まって近代日本文学には共通のモチーフがある、という。すなわち、男性主人公が恋愛をして相手の女性を妊娠させてしまい、そのことに苦悶するというモチーフである。近代化の過程で、「自由恋愛」と「立身出世」が人生の課題として同時に提供されると、「自由恋愛と立身出世のはざま」でこうした妊娠(させる)問題が、形而上的にあるいは人によっては現実的に生じていたのである。

日本の近代文学に発見されるこうした「妊娠」現象は、近代になって、家族こそが次世代を作る場として固定されてしまったことと、そこから排除された性があることをはからずも反映している。そして、もっぱら血縁で固定化されていく家族と、そこから排除された性の営みが混在すると、男女にとっては倫理的責任問題が発生し、生まれた子にとっては誰の子かという悩みが発生して「出生の秘密」が鮮明化するのである。

ただし、三浦雅士が『出生の秘密』で明らかにしたところによれば(三浦2005)、自分自身の出生を自分で目撃することはできないという点で、人間にとってそもそもそれは根源的な秘密ではある。それを探求する欲望が小説家をして小説を書かしめると言う。さしずめ、自ら養子に出されて養父母になじめずにいた夏目漱石などはその典型的な例であり、アイデンティティの模索の過程をそのまま小説として結実させていったことが知れる。

こうした近代小説の成り立ちは、近代家族の誕生と同様に、決して日本に限ったことではない。精神分析の分野において、フロイトは『夢判断』のなかで、両親との関係を想像上変更するという幻想が患者に見られることを指摘し、これを「家族小説(Familienroman)」と呼んだ。一般的に子どもたちは弟や妹が生まれたときに疎外感を感じるなどして、自らの出自を疑ってみたりするものだが、強くこの観念に囚われたままであると出自を妄想してしまう。また、母を奪いあう構造的対立関係から父を憎むと

いうエディプス・コンプレックスも密接に関係することもある。こうした理解がひとたび発見されると、さらに理解は次のように進化を遂げていく。

フロイトの弟子であったマルト・ロベールは、この「家族小説」というフロイトの思いつきを援用して物語へ転化するという小説論を展開してみせた。すなわち『起源の小説と小説の起源』(原著は1972年)で、自分自身の起源を探求するという空想物語が、孤児の物語、捨て子の物語、私生児の物語に展開し、近代小説にまで発展するとした、とする。そう言えば、吉本ばななの『キッチン』(1988年)にもまた「出自の虚構」を容易に発見することができよう。

概して小説家という職業人は、自分が何者であるかとか、いかに生きるかという問いに答えようとして虚構を組み立てる際に、あらかじめ主人公の出自を不分明にしておき、そこから「家族」を創出していくという創作技法を援用するものであるらしい。フロイト風に言うなら、いわば出自妄想者の語りの形を多くの小説が模倣する。

以上のように、〈出生の秘密〉は、人間にとって根源的であり、したがって古今東西、文学的創作上の秘訣である。この秘訣を応用しながら、広義の〈出生の秘密〉のうち、〈妊娠問題〉(女性を妊娠させる問題)にこだわった文学作品が、日本近代文学には数多く生まれたのであった。

そして、本稿で問題にする井上靖の創作したチンギス・ハーンの世界もこの〈妊娠問題〉という主題と深く関わっている。『蒼き狼』では、〈妊娠問題〉あるいは〈出生の秘密〉に関連して以下のような挿話が冒頭から並べられていく。

1. テムジン(チンギス・ハーンの幼名)の母ホエルンは略奪されて、父のもとに来了。
2. だから、父エスゲイの実子ではないと異母兄ベルクトに陰口をたたかれた。
3. テムジンはその陰口の主である異母兄ベルクトを射殺した。
4. テムジンの第一夫人ボルテは略奪された。
5. 略奪された夫人は、十数回にわたって敵将に犯された。
6. したがって、夫人の産んだ長子ジュチは実子ではない。

これらの要素のうち『元朝秘史』に記されているのは1と3と4である。また、6については明記されていないが、ジュチという名前が「客人」を意味

しており、弟のチャガタイに難癖をつけられて言い争うシーンが『元朝秘史』巻11にあることから一般に事実であろうと了解されている。すると、2と5だけが井上氏による創作的エピソードだということになる。6つの要素のうちたった2つを追加したにすぎないのだが、こうしたエピソードの追加によって、まったく異なる理解が提示されたことは注目されよう。

オリジナルの『元朝秘史』では、テムジンの父エスゲイは、オンギラート族の1つのオルクヌート氏の女性ホエルンをメルキト族から略奪し、テムジンが生まれた。テムジンは、別の氏族の女性から生まれた兄を殺し、けれどもその弟を活かして生涯の部下とする。許嫁を得るために、母の里であるオンギラート族オルクヌート氏への旅の途中で、同じくオンギラート族のボスクル氏と出会い、その女性ボルテをもらうことに決める。ところが、彼女はメルキト族に復讐として奪われたので、父の盟友や自身の盟友の協力を得て取り戻したものの、生まれた子ジュチはメルキト族の血が流れており、ただし、そのことにチンギス・ハーン自身が悩むことはない。

ところが、井上靖の『蒼き狼』では、テムジンは、自分自身に敵の血が流れていると陰口をたたかれ、その悪口を言った異母兄を殺害し、ずっと自らの出自に悩み、がんばって自己証明するしかないと思った矢先に、妻を奪われ、妻はさんざんに犯されており、彼女を奪還してみたもののすでに敵の子を身ごもっていたので、生まれた長子に対しては自分と同じように出自の欠陥を克服するように期待する、という物語となるのである。

研究翻訳が文学作品に転換されるときに、明らかに創作が生じている。この創作は以下のように分解しておくことができるだろう。

第一に、『元朝秘史』では歴史的な事実として印象づけられるように記されていた「正妻の略奪」という政治的ゲームに関して、井上は女性への強姦という挿話を明示的に付け加えた。これによって、読者にとっては〈妊娠問題〉が明らかとなった。

第二に、略奪後、奪還前の妊娠を明らかにすることによって、読者をして〈出生の秘密〉に着目させた。

第三に、妻のボルテと息子ジュチについて『元朝秘史』に記されていた一連の事件〈略奪・妊娠・出生〉と同じパターンの挿話を、母のホエルンと息子テムジン(チンギス・ハーン自身)にも発生してい

るかのように仕向けた。言い換えれば、井上は二世代にわたって〈出生の秘密〉を繰り返した。これによって、いやがうえにも主題として〈出生の秘密〉が強調された。

第四に、そうした〈出生の秘密〉を克服するために努力するという筋を井上は設定した。「出自に悩む男が成功する」物語を父チンギス・ハーンと息子ジュチの二世代にわたって強化して完成させた。

以上のように、文学の秘訣とりわけ日本近代文学の秘訣を念入りに取り込んで、『蒼き狼』は世に生まれ出たのである。

5. 〈出生の秘密〉の応用

井上靖が『蒼き狼』で文学的主题として設定した〈出生の秘密〉はその後の作品でどのように応用されるであろうか。

井上作品から12年後の1972年、チンギス・ハーンを主人公とする小説『ジンギス汗』が楳本捨三によって著されるが、これは1955年の作品『成吉思汗』の再刊行である。いずれの版にせよ、楳本作品ではチンギス・ハーン自身に〈出生の秘密〉は設定されていない。一方、妻ボルテの略奪については、すでにテムジンの子を宿していたという設定にしており、その胎児を守るために略奪した人びとの言いなりになると設定されている。この部分は、再刊時に章タイトルが「美女ブルウテ」から「悪夢」へと変更があり、貞操感が維持されていることをより強調するタイトルへと変更されている。そして、夫テムジンのもとに戻って来たときにはすでに子どもを連れており、その子はテムジンの実子であるにもかかわらず、テムジンには理解してもらえないので妻ボルテが母として苦悩する、というドラマがつくられている。

つまり、楳本作品において、『蒼き狼』の主題である〈出生の秘密〉は、チンギス・ハーン自身には設定されず、ジュチにのみ設定されている。ただし、実際の出自に問題はなく、ただ疑われているという設定なので、〈出生の疑惑〉が設定されていた、と言える。

さらに、楳本作品の後半では、母ボルテよりもむしろジュチ自身が悩む。それが兄弟関係や恋愛関係にまで影響を及ぼしており、また父チンギス・ハーンが悩んでいるだろうと思いやって悩む。このように楳本作品においては、〈出生の疑惑〉という主題が、

兄弟や恋人とのあいだに創作された会話によって、はっきりと強化されていた。ジャムカの死で終わるので、この模本作品は、『元朝秘史』で言うと巻8で終わっていることになる。こうした基本的な結構は初刊で実現されているので、井上作品に先立って、ジュチに関して、〈出生の秘密〉ではなく〈出生の疑惑〉が設定されていた。

他方、神戸在住の華僑である陳の作品では興味深いことに、こうした〈出生の秘密〉であれ、〈出生の疑惑〉であれ、出生をめぐる文学的テーマはまったく取り上げられていない。略奪前に妊娠していたという立場で解説するにとどめている。

2000年の森村作品は、模本作品の主題であった〈出生の疑惑〉を息子ジュチではなくチンギス・ハーン自身に設定して展開している。すなわち、模本作品に見られた主題である〈出生の疑惑〉という問題を、井上作品に見られた発想である〈チンギス・ハーン自身における問題〉として接木したことになる。以下に詳細に確認しておこう。

森村作品における〈略奪、妊娠、出生〉という一連の事件は次のように設定されている。まず、略奪された直後にホエルンは、新しく夫となるエスゲイへの復讐を心に誓う。次に、テムジンは略奪後1年以上経ってから生まれるので、出自上の秘密を設定させない。ただし、母はこの生まれたばかりの赤ん坊に新夫エスゲイへの復讐を託す。このように、森村作品では、実の息子が、母にとって略奪をした敵であるがゆえに実父を憎むという設定となっている。まさしく、エディプス・コンプレックスが設定されたのである。

森村作品では続いて、エスゲイの死後に、一家は近縁集団に見捨てられる。その理由が、テムジンの出生に対する言いがかりであり、その結果、自ら引率する集団の中でもテムジンは出生に疑いを抱かれるようになる。

このように森村誠一は、井上靖によって発明された〈チンギス・ハーン自身における問題〉としての〈出生の秘密〉をひとたび否定する状況に設定したうえで、再び利用することによって、〈出生の秘密〉ではなく、不当な〈出生の疑惑〉へと変更しているのである。

一般に、エディプス・コンプレックスとは、世界各地の神話から導かれた概念であった。フロイトの弟子であったオットー・ランクは『英雄誕生の神話』

(原著は1906年)で、子どもが成長過程で囚われる観念や行動と、虚構化された物語上の英雄とが呼応することを指摘した。世界各地の神話を渉猟してその典型を整理すると、身分の高い両親のもとで、生前から困難が設定されており、まず誕生を警告する告知(夢、神託)があるのだが、その内容はたいいてい父の危機を予告するものであるため、この危機を回避せんがために、父あるいは父の代理者によって、子どもは生まれてから殺されるか捨てられるかし(たいいてい箱に入れられ水に流される)、それを動物もしくは身分の低い人間が助け、当該の子は無事に成長し、ただし紆余曲折があり、ついに実の両親に再会し、父に復讐して名声を得る、というものである。

ところが、まったく100%神話的創作であるわけではない『元朝秘史』では、実際に父エスゲイが早々に毒殺されてしまうので、森村作品のように、母ホエルンに復讐心を設定し、またそれによって息子テムジンにエディプス・コンプレックスを設定したとしても、物語の冒頭部で早々にコンプレックスを抱く対象そのもの(父)を失ってしまう。その喪失を埋めるかのようにして「地果て海尽きるまで」征服を続けるという筋書きになっているようである。

息子のジュチについては、『元朝秘史』の巻11において、相続の議論に際して弟チャガタイから、父の実子ではないと謗られるが、チンギス・ハーンは差別するような人ではなかったことが、ジュチのセリフによって強調されるようになっている。一方、井上靖の『蒼き狼』では、チンギス・ハーンは自分自身と同じ悩みをもった男として息子のことを終生、気にかけて、応援し続けたうえで、最後に裏切られたというシーンを演出し、さらに裏切りがデマだったというシーンも演出して、ジュチの死を悼むチンギス・ハーンを人間的に描いていた。森村作品でもこのプロットはそのまま踏襲されている。

以上のように、チンギス・ハーン自身に対して〈出生の秘密〉を設定しているのが井上作品で、それを〈出生の疑惑〉に変更して設定しているのが森村作品である。後者を前者と比較しておこう。

第一に、チンギス・ハーンに設定されるのはエディプス・コンプレックスであり、しかし、父エスゲイが毒殺されることによって消失したので、複雑な心理を抱えることなく、実力を発揮していく。

第二に、同様に複雑な心理を抱えることなく、息

子ジュチについてもそれほどずっと悩むことはない。ジュチが業務命令違反を犯しているという噂を聞いて激怒する程度である。

第三に、遺言に意味を持たせて、チンギス・ハーンの死後についても多くの紙幅を割いている。『元朝秘史』の扱っていない時代、すなわち孫のフビライ軍が日本にやってくる元寇まで言及して終わる。このように、森村作品は井上作品に比べれば、〈出生の疑惑〉を文学的主題として利用しつつも徹底することはなく、歴史解説に近い性格を帯びている。言い換えれば、井上作品は、突出して心理ドラマと呼びうる性格を帯びていたのである。小説として人気を博した理由が了解されよう。その主題の核心は世界的英雄チンギス・ハーン自身に設定された〈出生の秘密〉にあり、それによって小説は全体として〈脛に傷を持つ男の立身出世の物語〉となるのである。歴史上、最大の版図を築いたなどと一般に賞賛されてきた人物に関して、意図的に傷を付すことで身近な存在にせしめた、という点で、まさしく大衆化が果たされた、と言えよう。

2006年に執筆が開始された堺屋作品は、本文のほかに注釈が多く、本稿でとりあげた5作品のうちでは、最も歴史解説に腐心しているという意味で非文学的である。井上靖が文学作品において創造した〈チンギス・ハーン自身の出生の秘密〉と、小林高四郎が翻訳書において歴史的事実と解説した〈長男ジュチの出生の秘密〉については、第1巻の注で、「妻ボルテの略奪」の真相は？と題しておおよそ次のようにまとめている(堺屋2007: 281)。

チンギス・ハーンの父が女を略奪して妻にしたという点については「史実では跡付けられない。情況としても嘘臭い」として退けている。すなわち、チンギス・ハーンの出生の秘密をまったく否定している¹⁰。その代わり、妻ボルテが略奪されたという点については「事実だろう。各史書にも書かれているし、」として受け入れている。すなわち、息子ジュ

チの出生の秘密については肯定している。

ただし、本文では、妻ボルテを奪還した際に生後二ヶ月の赤子を抱いていたためにチンギス・ハーンは一瞬、わが子ではないという疑惑を感じて悩むけれども、自分の子として育てようとするという筋が仕立てられている(堺屋2007: 212-213)。妻を奪還した際に彼女が赤子を抱いているという状況設定は、模本作品を踏襲している。この操作によって実は妊娠時期が前倒しされるので、自分の子である可能性が高まるから、〈出生の秘密〉ではなく〈出生の疑惑〉を設定していることとなる。そして、この疑惑を父として否定してみせるという状況設定は、他の作品に見られない性格設定になっている。すなわち、そんなことにくよくよ悩まないのが英雄であるという見方が示されていることとなる。

このように、日本の5大作品は全体として、英雄をめぐる〈出生の秘密〉についての多様な解釈を展開させている。こうした解釈の多様性をもたらした原因は何よりも『元朝秘史』そのものがもつフィクション性であったろう。

6. さいごに

『元朝秘史』はそもそも史実をありのままに記載したものではないことが了解されているので、これをどれほど正確に利用しても、あるいは正確に利用しなくても、史実かどうかを議論するのは不適切である。また、文学である以上、創作活動であり、史実を超える力量がそもそも作者に求められている。したがって、歴史を舞台にした小説や映画の内容について、史実かどうかを争うこと自体、不毛である。ましてや、異文化に属するという意味での他者が、ある集団の歴史や文化を利用するときには、なおさら誤解に基づく利用があっても当然であると思われる。今日、街を歩いても、雑誌をめくっても、あらゆるところで、外国から流入した現象を勝手に自己流に解釈して利用しているという状況に満ちている。すなわち、私たち現代人の生活世界はそもそも、異文化理解というよりもむしろ〈異文化誤解の複合体〉として成立していると言っても過言ではない。史料の利用ならびに異文化の消費について、そのように理解しておいたうえで、2007年に日本とモンゴルの合作と謳われた角川映画『蒼き狼一地果て海尽きるまで』をさいごにふたたび位置づけておこう。この映画は、そのタイトルに明瞭に現われているよ

10 したがって、脛に傷をもつ男の出世物語ではなくなっているが、現代に何故チンギス・ハーンを取り上げるかという問いを設定して著者は、不遇故に成し得た「時代の変革」であると説明しており、幼少期の艱難辛苦を克服しつつ、世界を変革していったことが強調されているという点では基本的に異ならない(堺屋2007: 244)。

うに、井上靖の『蒼き狼』を参照した作品である。映画『蒼き狼』では、チンギス・ハーン自身に関して〈出生の秘密〉は明示的に設定されていないが、母ホエルンをして「蒼き狼の血など要らぬ」と発言させていることからわかるように、井上作品にオリジナルな「蒼き狼の血の原理」に依存している。日本人によって生み出されて広く長く受容されてきた井上作品にもとづいているにもかかわらず、本映画は現代日本人にあまり受容されなかった。それはなぜだろうか。

すでに今日の日本人にとっては、「出生の秘密を持った男が出世する」という物語の展開は、受容しがたいのではないだろうか。三浦展が『下流社会—新たな階層社会の出現』で示すように、経済格差が明確で下流に上昇志向が見られないという現代においてはすでに、立身出世という概念が賞味期限切れとなっている、と考えられる。また、映画に活劇を求めないという根本的な理由があるのかもしれない(渡辺2007:37)。いずれにせよ、「出生の秘密を克服して出世した偉大な英雄チンギス・ハーン」という幻想によって日本とモンゴルがつながる時代はもはや終焉を迎えているように思われる。

一方、モンゴルでは、社会主義時代に禁じられていたとされるチンギス・ハーンについて、想定していなかった解釈が日本から提示されたために、当初は大きな反響が見受けられた(小長谷2007)。しかし、現在では世論も落ち着き、改めて自分たち自身で歴史を見直すという動きが生まれていると言う。だとすれば、誤解の効用とも言うべき現象が生じていると、日本人による映画化を積極的に評価することもできるだろう。

参考文献

- 井上靖 1959『蒼き狼』文芸春秋社
井上靖 1959「『蒼き狼』の周囲—成吉思汗を書く苦心あれこれ」『別冊文芸春秋』72号、166-169頁
井上靖 1961「自作『蒼き狼』について」『群像』1961年2月号、174-180頁
宇野伸浩 2005「モンゴル帝国時代の贈与と再分配」松原正毅・小長谷有紀・楊海英編著『ユーラシア草原からのメッセージ』平凡社
楳本捨三 1955『成吉思汗』鱒書房
楳本捨三 1972『ジンギス汗』番町書房
岡田英弘 1986『チンギス・ハーン—将に将たるの戦略』集英社
大岡昇平 1961「『蒼き狼』は歴史小説か」『群像』1961年1月号、217-225頁
丘英夫 2005『義経はジンギスカンになった! その6つの根拠』アーバンプロ出版センター
尾崎士郎 1940『成吉思汗』新潮社
小谷部全一郎 1924『成吉思汗ハ源義経也』富山房
幸田露伴 1927『龍姿蛇姿』改造社(『幸田露伴全集』第12巻所収、1950、岩波書店)
小長谷有紀 2007「日本映画『蒼き狼』に対するモンゴルでの評判」『文化の往還』ニュースレター2
小林高四郎 1940『蒙古の秘史』生活社
小林高四郎 1936(訳)ウラヂミルツォフ著『チンギス・ハーン傳』日本公論社
斎藤美奈子 1994『妊娠小説』筑摩書房
堺屋太一 2007『世界を創った男チンギス・ハーン 絶対現在』日本経済新聞社
高木彬光 1958『成吉思汗の秘密』光文社
陳舜臣 1997『チンギス・ハーンの一族』朝日新聞社
土井全二郎 2006『義経伝説をつくった男—義経ジンギスカン説を唱えた気骨の人・小谷部全一郎伝』光人社
那珂通世 1907(訳注)『成吉思汗實録』大日本図書
フロイト 1957『夢判断』新潮社
三浦展 2005『下流社会—新たな階層社会の出現』光文社
三浦雅士 2005『出生の秘密』講談社
宮脇淳子 2002『モンゴルの歴史』刀水書房
宮脇淳子 2006「井上靖の『蒼き狼』は歴史小説であるか、単なる英雄物語、どちらか?」『べるそーな』2006年9月号、72-75頁
森村誠一 2000『地果て海尽きるまで—小説チンギス汗』角川書店
森村宗冬 2005『義経伝説と日本人』平凡社
柳田泉 1942『成吉思汗平話 壮年のテムジン』大観堂
山本健吉 1961「歴史と小説」読売新聞(夕刊)昭和36年1月18日
ロベール、マルト 1975『起源の小説と小説の起源』河出書房新社
渡辺信也 2007「観客の欲望をつなぎとめるため

に「日本映画考」『nobody』25、34-37頁

Badamkhatan 1996 *Ethnography in Mongolia*
vol.3. (in Mongolian) Ulaanbaatar

Bulag, U.E. "Hunting Chinggis Khan's Skull and
Soul: Eurasian Frontiers of Historical, Ideological
and Racial Imaginations" (unpublished
manuscript)

Horchabaatar, L. (拉・胡日查巴特爾) 1990 『哈騰根
十三家神祭祀』(モンゴル語)

Miyawaki, J. 2006 "The Japanese origin of the
Chinggis Khan legends", *Inner Asia, Mongolia
& Inner Asia Unit, University of Cambridge*,
Volume 8, Number 1, 2006, pp.123-134.